
海風靡く、この島で。

seafield

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海風靡く、この島で。

【Nコード】

N9201Y

【作者名】

seafield

【あらすじ】

突如、東京の実家から「養う金がないから」という理由で追い出され、汐羽島しおはねじまという島で暮らすこととなった中川遼なががわりょう。

その边境の島 汐羽島で送る波乱万丈（？）な日々。

第1章（前書き）

初めまして！

初連載となります。楽しんでいただけたら幸いです^^

第1章

見下ろした景色、というものは初めて見るが中々見栄えるものだな。

丘の上から見下ろした果てしなく広がる蒼い蒼い海というものは、太陽の光の反射というプラス も加わって、それはもう自然の偉大さというか、神々しさというかを感じさせた。

芸術感性など全く持ち合わせていない俺ですら、この景色は心震わせるものとして認識できる。

幾重にも聞こえる力モメの鳴き声が風の音と共に流れていき、それに波音が加わって心安らぐハーモニーを創り出す。

……何て柄でもないことを言っただろう俺は。全く。どこの臭いセリフを吐きまくるポエマーだったんだ。

やめだやめ。

空を見上げれば、海とはまた違う青色をしていた。

夏を象徴するような入道雲が水平線の彼方に鎮座している。

地球 いや、宇宙って凄いやなあ。こんな景色創り出せるんだもん。

……と、景色にいつまでも感動している場合ではない。俺には今日中にやらなければいけない仕事というものがあるのだから。

名残惜しみながらも海に背を向け、丘を下り街並みが広がる景色が広がる場所へと俺は歩を進めた。

「お前、一人暮らしする気ないか？」

親父がそんな妄言を吐いたのは1ヶ月前のことだった。

代々中川家では育児方針として放置主義をとってきた、らしい。

勿論、その方針に則^{のっと}って一人っ子である俺は、人間にとつての健康的で文化的な最低限度の生活を送らされていたわけだが。

そんな日々を送っていた中で、高校二年生の一学期の終業式が終わった次の日。

先程の妄言を親父が吐きやがった。

当然「はあ？」となるわけだが、親父は俺に反論する隙も与えず早口に捲し立てた。

「お前を養う金がないから、汐羽島^{しおはねじま}という所でお前は一人遅しく生きる。わかったな？ いや、わかれ。よし、流石は俺の息子だ。それでは、これでさよならだ。じゃあな、息子よ。あ、これが船のチケットだ。どこの船かは自分で調べろ。よし。ではもう会うことはないだろう。アディオス！」

上記の言葉を5秒も掛からないで俺に言い終えた親父は、俺に旅行用の巨大な肩掛けのバッグを持たせ、俺を家から追い出した。

ドアノブを捻れば、ご丁寧にも既に鍵が掛けられている。

俺は小さく溜息を吐いたあと、船のチケットだけを頼りに船着場を目指したのだった。

いやいや、軽い俺。家追い出されて悲愴に暮れることもしないで、自分の住を求めに行くなんて。

何ともたくましくなったものだ。誰かこんな俺を褒めてくれよ。

……そんなやついませんね。世知辛い世の中だもんな。

こんな性格になったのも、一応、あのおかしなおっさん+飯だけを淡々と作ってくれていたお袋のおかげなのかなあ。いや、せいかな？ どっちでもいいや。

などと、多少の自虐を混ぜつつ俺は決意、とまではいかないが、というかむしろ強制的にだが、汐羽島で暮らすこととなったのである。

る。

.....
.....
.....

回想終了。

回想短いな、おい。

一人暮らしをするというビッグイベントが起きようとしているのに、それまでの過程プロセスこれだけかよ。

……まあ、これだけだよなあ。

海風が煽る街の中を歩きながら、俺は「ははは」と乾いた笑みを浮かべる。

街は名も知れた街でもない割には綺麗な街だった。

住宅がある程度の間隔を開けながら、余裕をもった感じで建て並んでいる。

丘から下ってきた道が街の一番大きな道路となっており、その道路を中心に複数に小さい道路が枝分かれしている。

建物は全体的に白で統一されていて皆似たような姿形。

思ったよりも、中々小洒落た島じゃないか。

周りをキョロキョロ見回しながら歩くという、田舎者が都会に来たみたいな状態になっているが、自分が住むことになる街を観察するのは当然だと思っているから全く問題ない。

いやいや。別に景色に感動してキョロキョロ見回してたわけじゃないから。あくまで観察だから。そう、アイアムオブザーバーなの。あれ。こういう場合って冠詞必要なんだっけ？

アイアムアオブザーバー！。

あ、違う。オブザーバーだから、冠詞はアンか。
……どーでもいいや。

本当にどーでもいいことを考えながら、俺は大きな道路を道なりに歩いて行く。

その先にあるはずの建造物を目指して。

*

「ああ、君が遼^{りょう}くんだね」

校長室にノックしてから入ると、校長の第一声は予想だにしないものだった。

「え、何で俺の名前」

「ああ。説明が遅れたね。私はこの学校の校長の佐倉^{さくら}だ。君のお父さんとは、まあ平たく言うなら友達だ」

ああ。

どうして親父がこんな所に俺を寄越したかと思えば、なるほどツテがあつたのか。

「君も大変だったね」

「いえ。ところで本題に入っていたきたいんですが……」

「おお。すまない。君は明日からこの高校に通ってもらうわけだが、この高校について何か教えてもらったことは？」

「皆無です」

「そうか。それでは、まず教えとくことは、この学校は二学期制ということだ」

「二学期制？」

「うむ。文字通り二学期制だ。だから、夏休みというものは存在しない」

「マジで!？」

高校生活に夏休みが存在しないなんてあって良いものだろうか、いや良くない。絶対良くない！

「落ち着きなさい。その代わり秋休みがある」

「え、秋休み？」

聞き慣れない単語に思わず首を傾げる。

「そうだ。まあ、もうしばらく先の話だけだね」

「あ、そうっすか」

「それで」

それから校長の話は30分近く続いた。要約するとこんな感じだ。

ここ、汐羽高校は二学期制を取っている。

明日から学校にこい。

集合時間は八時半で、職員室に教材は用意されているから、それらを持ってから担任と共に教室へ行け。

制服はまだ準備出来ていないため、前の学校のを来てこい。

以上。

……何でこれだけのことを伝えるのに、30分も掛かったんだろ
う。不思議なことに自分でも何故かわからない。

校長の口車に上手く乗せられたということか。いや、これ意味違
うし。

……うん。どーでもいいな。

校長室から出て、物静かな廊下を歩きながら下駄箱を目指す。

こんなにも静かなのは、今日が日曜日だからだろう。時間を確認
すると、昼の12時を少し回った辺り。

下駄箱で靴を履いて外に出ると、途端に汗が吹き出した。

校長室という涼しい世界から、いきなり猛暑の世界へと旅立った
のだから仕方あるまい。

先程まではあまり気にならなかったのに。畜生、校長め。

などと理不尽な怒りを校長にぶつけながら、俺は次の仕事へと向かう。

 このアパートなら、一人暮らしするには十分な広さだ
と思うし、かなり安いからお勧めだよ。

校長から授かった情報と地図を元に、「住」のためのアパートを探す。

交差点を曲がって、交差点を曲がって、交差点を曲がって……
わかるかあああ
！！

何だこの地図はああ
！！
完全迷子だよおお
！！

「……………」

よし、落ち着け俺。

慌てたって、何も良いことはないぞ。

目を瞑って一度深く深呼吸をし、脳に酸素を行き渡らせる。

心が落ち着いたのを確信してから、俺は再び目を開いて地図を見た。

おお！ 先程まではわからなかった地図が手に取る様にわかる！

……………わけないな。

冷静な脳で考えてもわからない地図って、もはや地図って言わねえだろ。地図の意義が消えてるよこれ。

「はあ」

俺は一度肩に掛けてある無駄に重いバッグを下ろした。

さて。かれこれ、一時間近く歩いているわけだが、流石にこの炎天下でノーレストで歩き続けるのは厳しいものがある。

どこかで休まないと

……………あれ？

何だか体がふらつく。

やばい、馬鹿した。

この症状は知っている。炎天下の中、一時間近く　いやこの街にきてからだから二時間近くか。そんな長時間、一度も水を取らずにくそ重いバッグを持って歩くという重労働をしていたのだ。

バタリ。

俺は地面に倒れこむ。

やべ。意識が朦朧としてきた。

そうだ。こんな時にこそ、保健の授業で習ったことが役立つんじゃないか。

確か、熱中症になった時の対処方法は

「！」

俺は重大なことに気付いた。気付いて、しまった。

……あれ、もう一人いなきや出来ないじゃん。

冷静に考えれば、いや今冷静な思考が出来るかなんてわかんないけど……そりやそうだよな。

熱中症になってるやつが何か行動起こすなんて、無理に決まっている。

衝撃の事実に関力が抜け、俺は意識が無くなった。

*

「ねえ、大丈夫？」

声が聞こえる。女の声だ。

やべ、幻聴まで聞こえてきやがった。ん？　幻聴？

いやいや、俺意識なくなっただから、これは

あ、やべ。天からの迎えが来たのか。って、何故そうなる。

「大丈夫？」

「み……ず」

「え？」

「水……」

渴き切った喉から何とか声を絞り出す。

この女の姿は未だに瞼を閉じているため見れない。そう。今はただ体が水を欲していて、瞼を開くことも億劫になっていたのだ。

いや、それ以前に目が何か　おそらくタオルなんだろうがに覆われている感触がするから開いたって見えないのだろうが。

「水ね。わかった。ちよつと待つてて」

女が立ち上がった離れて行く気配がする。

優しい女ひとだな。見知らぬ男の要望に何の文句も言わずに従ってくれるなんて。

そもそも道端で倒れている見知らぬ男を、こうやって看病してくれていること事態奇跡だろ。

今時の女はビッチみたいな奴らばかりだと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。ああ、世界よ。疑って悪かった。この世にはこんなにも優しい女ひとがいるんだな。

俺が感無量な面持ちに浸っている間　と言っても一分も経っていない　に女が帰ってきた。

「起き上がれる？」

「あ、ああ」

正直起き上がるのも億劫なのだが、そんなに甘えてばかりもいられない。

俺は体を起こし、瞼の上に置いてあるタオルを取る。

「はい、これ」

ようやく声だけだった女とご対面か。

俺は声がした方を向いた。

「……」

息を飲む。思わず絶句してしまった。

薄く茶色がかったセミロングの髪。端正な顔立ち。茶色の瞳。白いワンピース。

一瞬、本当に天使かと思った。いや、天使と言うよりも女神かもしれない。

それほどに女は綺麗だった。俺が出会ってきた女の人の中で一番「どうしたの？ 体調悪い？」

思わず見惚れ、固まってしまった俺を女が心配する。

「あ、悪い。大丈夫だ」

俺は女が持ってきたジョッキ一杯の水を　　って、ジョッキかよ。何でコップじゃねえんだよ。ジョッキで水飲むやつとか始めて見たよ。ん？ あ、でも飲むやつは俺か。なるほど。初めては俺自身というわけか。

初めて俺がジョッキで水飲む俺を見た。

……何言ってるんだ、俺は。どうやらまだ俺の頭はおかしいらしい。

……自分で言っておいて自分で悲しくなってきた。

うわっ、俺面倒臭い奴！

「おい。飲まないの？」

女は水が入ったジョッキをグイッと突き出す。

やはり、違和感満載だなこれ。

だが、喉がカラカラなのも事実。

背に腹はかえられない、というやつか。

俺はお礼を言ってから、女からジョッキを受け取り中身を飲み干

せない。いや、流石にジョッキ一気飲み（しかも水）は無理です隊長。

「ぶはあっ」

三分の二程の水を飲み終えてから、ジョッキから口を離す。

ああ、水ってこんなにも美味しかったんだな。

渴き切った砂が水を吸収するかのごとく、俺の喉は潤いを取り戻

した。

「どう？ まだ体調悪い？」

女は俺からジョッキを受け取ると、またもや不安げに尋ねた。
うーん。何て優しい女ひとなんだろう。綺麗な上に、性格まで良い。
人間こんなに出てていいのか？

「ああ、もう大丈夫。水飲んだおかげで、大分回復したよ」

「そう。なら良かった」

女はニコリと微笑んでから、ジョッキを片付けに襖の奥へと消えた。

そういえば、ここは

辺りを見渡せば、一面畳で埋め尽くされている部屋。その真ん中に布団が敷かれ、俺はそこに座っていた。

タンスに押入れ、壁に掛かっている家の形をした時計以外に特に家具は置かれていない。

よく言えば純和風の昔ながらを感じさせる佇まい。

悪く言えば質素で地味。

おそらく彼女の家なのだろうが、彼女の部屋というわけでもなさそうだ。

……て、情景描写している場合じゃない。

時計を確認すれば、既に夕方の六時を回っている。いつまでもお世話になるわけにはいかない。

俺は布団から抜け出して、丁寧に畳む。

「ちよつと、もう起き上がって大丈夫なの？」

「ああ、もう大丈夫だ。色々お世話になったな」

後ろから掛かった声に、バッグを背負って振り返ってから礼を告げる。

「じゃあな。本当にありがとう」

俺は半ば呆然としている彼女にお辞儀をしてから扉を開き、外の黄昏世界の中へと旅立った。

夕方だというのに、未だ暑さは健在で思わず溜息を吐く。

さて、と。今からすることは……

「……………」

ピンポン。

「はい……え？」

「すまん。このアパートの場所わかるか？」

彼女の家に引き返すことだった。

いや、俺馬鹿にも程があるだろ。熱中症になった理由思い出せよ。ましてや彼女の家がどこにあるのかなんて知らないんだから、尚更迷子状態だろうが。

「ぷ……ぷぷ」

と、散々自分を罵倒していると、彼女が突然吹き出したように笑い出した。

「…………馬鹿で悪かったな」

心優しい彼女にまで馬鹿にされるなんて、俺よっぽど馬鹿なんだな。いや、どちらかと言うとアホなのか。

「違うの」

「え？」

「先程堂々と家出ていったのに、すぐ戻ってきたのがおかしくて」

「やつぱり馬鹿にしてんじゃない！」

やべ。今のは不意打ちだった。

違うと否定されて希望が開けてきた所からの、突然のシャットアウト。

思わず地面に跪いて地面を殴りまくる。いや、思わずでこんなに地面殴っちゃうのかよ俺。卑屈すぎるだろー！

「え、ちよっと、ごめんね？ まさか、そんなに傷つけること言っただなんて」

彼女はオロオロしながら、しゃがみこんで、跪いている俺の顔を覗き込む。

「ああ大丈夫大丈夫。よくあるから」

「よくあるんだ!？」

彼女は驚きから目が点になっていた。

「あ、それでさ。ここのアパートの場所わかる？」

「切り替え早いね……と、『海鳴荘^{うみなりそう}』？ あ、これなら、私の家の近くにあるよ」

「お、マジで？」

「うん。ここから歩いて十分くらいじゃないかな」

「お、そうか。でさ、悪いんだが……」

「あ、うん。案内してあげればいいんだよね？」

「女神！」

「え？」

「いや、余りにも良い人すぎて、女神みたいだなあって」

「あはは。大げさだよ」

「大げさじゃないって。東京行ってみ？ ビッチばっかだから」

「ビッチ？」

「いや、ビッチ」

「……『びっち』って何？」

「……すまん。俺が悪かった」

「え？」

「知らない方がいい」

「え、何それ？ 気になるよ」

「君は純粹で無垢なままでいてください」

「意味わからないよ？」

「とりあえず、知らなくていい。忘れてくれ」

「？」

彼女は訝しげな表情をしていたが、俺が断固拒否の姿勢を保ち続けると諦めたかのように尋ねるのを止め、「それじゃ行こっか」と歩き出した。

俺は彼女の隣に並んで茜色に染まる街並みの中を歩いて行く。

「そういえば今更だけど、あなた引つ越してきたの？」
確かに今更だ。

「ああ」

「お父さんとお母さんは？」

「東京にいるよ」

「え？ あなただけが引つ越してきたの？」

「そ。親父らは生活費足りないからって、俺を追い出したの」

苦笑混じりに、傍^{はた}から聞くと重い内容をのっけからんと話してみせる。

「……淋しくないの？」

「全然」

俺はハハツと乾いた笑みを浮かべる。

「そっか……遅いんだね」

そう。俺は遅いのだ。……遅い方だと思う。

「ああ、悪いな。何か空気暗くなっちゃったな」

「うっん。元々私から質問したんだし」

「話変えるか」

「そうだね」

「そういえば、今更だけど本当にありがとな。下手すりゃ俺死んだよ」

「ホントびっくりしたよ。買い物から帰ってたら、道端で人が倒れてるんだもん」

「迷惑おかけしました」

お辞儀をして謝罪を述べる。

「水分取らないでいたんでしょ？ この暑い中水分取らないなんて、熱中症なりにいってるようなものだよ」

彼女は呆れたように溜息を吐いた。

「いや、俺も水分取らなきゃヤバイってことに気付いたのが、倒れる直前だったから」

「喉渴いたって思う前に水分取るべきだった。喉乾いたと思った時

点で既に脱水症状起きてるんだから」

「そうなのか？」

それは知らなかった。つまり、喉が多少乾いていても我慢してることが多い俺って、いつ熱中症になってもおかしくなかったってことか。

「詳しいんだな」

「まあね。医学関係の本は昔読み漁ってたから」

「医者目指してるのか？」

「まさか。私が救いたかったのは一人だけだから」

「一人だけ？」

「！ な、何でもない。今の忘れて」

「え？ なん」

「忘れて」

なんで？ と聞こうとしたが遮られてしまった。

まあ、話したくない内容らしいし、深く追求するのはよくないな。

「ん、わかった」

「ありがと」

彼女は安堵から頬を緩ませた。

「あ、ここだよ」

おお。話している間に着いたようだ。

顔を上げれば、思ったよりもボロくない薄水色のアパートが鎮座していた。外壁にシミなどは見られるものの、ひびなどは見られない。

「それじゃ、私もう行くね」

ここまで案内してくれた彼女にお礼を一通り述べてから、俺は彼女の背中を見送った。

……あれ？ 何か大事なことを聞き忘れてないか？

「ちよつと待って！」

彼女はキョトンとした表情でこちらを振り返る。

「君、名前は？」

そう。あれだけ長い時間一緒にいたにも関わらず、お互いに名乗るのを忘れていたのだ。

何とも抜けている。……お互いに。

「私は坂本西夏^{さかもとせいかけ}。西の夏と書いて西夏だよ。あなたは？」

「中川遼^{なかがわりょう}。遼の漢字はしんにようを使うやつ」

「中川遼、ね。わかった。それじゃ、またね中川くん」

坂本は再び俺に背を向けると、暗闇の中へと姿を眩ました。

坂本西夏、か。

そういえば何年生なんだろう？

……そのことさえ聞いていない俺はやはり抜けている。

……同じ年だといいなあ。

何となく明日の学校を楽しみにしながら、俺はアパートの中へと入っていった。

第1章（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます！

遅い更新となるかと思いますが、長い目で見ていただけると幸いです。

感想、指摘などありましたら書いていただけると、作者が飛び上がって喜びます（笑）

これからよろしく願いますm（＿）（＿）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9201y/>

海風靡く、この島で。

2011年11月27日16時54分発行